

体験版

萌える空戦

CATFIGHT !!

キャットファイト

全員乙女の飛行隊

スズキケイ

# 日本乙女帝国・大斑海軍航空隊

おおむら

パイロット、及び主要キャラクター紹介

岩本恵子 十四才。物語のヒロイン。リアル中学二年生。

服装はセーラー服に黒スパッツ。二等飛行兵。ゼロ戦搭乗員。

別名、曲芸師。得意技は、『なんちゃって敬礼』（両手で円を描いて両手の平を頭に乗せる。とても人を和ませる敬礼）。

空戦では『失速開脚ひねりこみ』を披露する。

はわだ

葉和田ななこ 九才。小学三年生。

大斑海軍航空隊司令。大佐。

服装は、七つボタンの白詰襟に白スカート。

別名、はわわ司令。得意技は、『お漏らし。わがまま』。

さかがみれいか

坂上麗華 十四才。大斑空・飛行隊長。大尉。

服装は、黒詰襟にミニスカート。

別名、軍刀乙女。得意技は、『軍刀振り回し』『真面目な顔でやるおちゃらけ』

ひがしくじまり

東籤茉莉 十四才。通称、冥途小隊長。大尉。

服装は、ブランド白ドレス。

日仏ハーフのお嬢さま。撃墜数No.1のエース。

別名、白ドレスの地獄姫。得意技は、『執拗な追尾と権謀術数。冷酷無比の射撃』。

みやのこうじまるまる

宮小路磨磨 十四才。冥途小隊二番機。中尉。

茉莉お嬢さまに使えるメイド。服装はメイド服。

別名、垂れ目メイドのまるまろちゃん。得意技は『なごみセリフと危機で飛びだす突飛なセリフ』。

にしざわ

西澤イリヤ 十四才。通称ゴシック小隊長。少尉。

ゴシックドレスの元ヤンキー。服装は、黒ゴスロリ。

撃墜数No.2のエース。別名、黒翼の銀髪姫。得意技は、『靈感射撃。心霊的動体視力。さぼり癖』。

エリーゼ・ツンデル 十三才。通称ツンデレ小隊長。飛曹長。

国籍はドイツ。ナチ軍装マニアの留学生。

服装は、普通の女子中制服にナチ党の腕章。髪型は金髪ツインテール。空を飛ぶ時は、ドイツ空軍のコスプレをする。別名、ツンデレ。得意技は、『ナチ式敬礼とジーク・ハイル』。

おおみやすずね

大宮鈴音 十三才。通称、野獣小隊長。上飛曹。

服装は、白体操服にブルマ。別名、ねこみみ。グレムリン。

得意技は、『肉体百合攻撃。きりもみ急降下。動物の魔眼。空中主翼渡り』。

きつねみみこ

狐巫巫女 十三才。野獣小隊の二番機。二飛曹。

服装は、巫女服。

別名、キツネミミ。得意技は、『単座ゼロ戦、二人乗り』。

つきのとこ

月野兎子 十一才。野獣小队三番機。二飛曹。

服装は、ウサミミカチューシャにバニーガール服。

別名、バニーガール。得意技は、『幼児語と超絶編隊機動』

なかのみき

中野美紀 十三才。二等整備兵。ゼロ戦の整備員。岩本恵子機担当。

服装は、セーラー服に白スパッツ。

別名、触覚娘。得意技は『純情百合』。

その他、東籓茉莉の専門メイドさん多数。

くろだ

黒田 謎の政府高官。唯一登場する男キャラ。中年のオヤジ。

リアル世界の女の子を徴兵してバーチャル世界の戦場へ送り込む徴兵担当情報員。

A C T 1 徴兵

1

「おい。岩本恵子。昼休み生徒指導室まで来い」と担任の声が教室に響いた。

「ちよつと恵子、なんかやらかしたの？」と隣の席の友だちに囁かれた。

席を向けて固まっていた同じ班の女子にも、心配そうな顔で見つめられた。

神奈川県海辺にある、とある女子中学校の教室の中、午前の授業が終わって楽しい給食中のこと。

中学二年の女の子、岩本恵子は、パンを齧りながら、少しあわてた。ふえ、呼び出し？ 私になか、やったつけ、と思う。

（生徒指導室って、ヤンキーとか不良が、体育の怖い先生にシメられる場所だよな）。と思って、びびる。

しかし、自分は入学以来、非行や淫行に走ったり、サツにパクられたこともない。ごく普通の真面目な中二だ。

思い当たることなど何もない。

担任がまたボケたか、と思う。

高齢化時代の老齢の教師だし。名前とかよく間違えるし。

急いで確かめないと。

とクラスメートの注視を浴びる中、急いで廊下へ出て駆けだした。

緊張した気持ちのまま廊下を走り、生徒指導室前へ達すると、恵子は給食のパンを口にくわえたまま、扉の隙間から中を覗く。

と、中には背広を着た見知らぬ中年男がいた。

「あれ。生徒指導の鬼瓦筋肉男じゃないよ」と不思議に思う。「誰だろ。知らない人だ」

インテリ風のメガネをかけた実直そうな四十代の男が、机の前に鎮座している。

立派なスーツを着て七三分けの髪型、傍に頑丈そうなスーツケースを置いていた。

学校の先生とはちよつと雰囲気が違う。

（何者だあ、あれは）と眉を潜めてしばらく観察した。

真面目なセールスマンのようっていて、メガネの中の眼光が、妙に鋭かった。

中学校にいることを密かに喜んでいる。

こういう雰囲気の間人は危ない。大人のロリヲタの特徴だ。

「これは、何か変だ」

一瞬の視認で、ただごとではないと踏んだ恵子は、急いで給食パンを飲み下し、ハンカチで口元を拭いた後、制服スカートのパン屑を払って指導室へ入った。

偵察哨戒モードで恐々挨拶する。

「……あのお。ここへ呼び出されたのですけど」恐る恐る聞く。「本当に私に何か御用なのでしょうか？」

「あ、岩本恵子さんですね」と男は、確かに名前を呼ぶ。

事務的な口調で言って、じつと恵子の顔を確認する。

やっぱり目つきが鋭い。

「どうぞお座りください」

背広を来た中年の男は、座ったまま丁寧な礼をした後、中学生に名刺を差し出す。

恵子は名刺を受取って字面を追う。

日本政府・内閣官房長官・代行。と書かれている。  
菊と桐の御紋が金箔押しされた厳かな名刺だ。

「まあ、どうぞ、お楽に」

男は恵子の落ち着くのを待って、間を置く。  
中学生は、名刺をまじまじと見つめている。

「これはあなたにだけ開示される情報ですが」と中年の男は切り出す。  
「私の来訪に関して、秘匿の義務はありません。女子中学生に、このような秘密を保て、と言っても無理でしょう。しかし、あなたの友人家族等に、この情報を漏らしても、誰も信用する者はありません」アナウンサー調のカクカクしたロボットののような音声で相手は前口上を述べた。

恵子は静かに聞いている。

「私は黒田と申しますが、一応、政府から文部科学省への出向者という建前になっております」

「……何が何やら、よくわかりませんが。なにかまわりくどいような」と警戒する。

「いや、色々と大人の事情がありまして」と冷静に言う。

「岩本恵子さん。あなたは数万人の中学生の中から抽選に選ばれました」

両手をテーブルの上で組んで、男は、さもよいことのように、もったいぶって言った。

「この選別に関して、国際協定で一切のリスクや報酬は禁止されています。よってお金も図書券も密林の商品券もだせません。無償の教育ボランティアとして国家プロジェクトに参加していただきたい」  
温和な顔の中に、鋭い目が光る。

恵子は不安がる。

「私が何に選ばれたのかわかりません。何かのテストを受けるんですか？ 文部科学省の知能テストみたいなもの？」

「そうそう。そのようなものです。でもテストよりもっと面白と思いますよ。もちろん、拒否することも自由です」

「……拒否したらどうなるのですか？」不安そうに聞く。

「別に問題は発生しません。まったくの自由です。この件に関する情



報も秘匿されます。これから参加してほしいのは、国連が開発した、あるコンピューター・プログラムのデイバック作業なのです」

「はあ、デイバックって」すつごく嫌そうな顔をする恵子。「なんで私が、そんなプログラム開発のゴミみたいな仕事を……」

「一応、説明申し上げます。ある未公開のベータ版・戦略対戦ゲームにコマンダーとして参加していただきたいのです。この選別は無作為に行われ、経過と結果のみがプログラム開発者グループに知らされます。開発者というのは某国連関係者とだけ申し上げておきます。公平を期すために彼らの素性は明かせません。この件に関する部外者への情報漏洩は完璧に守られており、一般社会からの政治的圧力など、妨害からも身を守られています」

「……」ちんぷんかん。

「暗殺やテロなど、国家のイデオロギー闘争の暗い時代は、とうに過ぎ去りました。」

それは中学の社会科でも習っているでしょう。

現代は宗教も左翼も右翼も、地球から全て有り難く滅んでおります。しかし人間には自我と共同体国家は残るのです。

国家間の国際政治でも、やはり譲れない所は譲れない、とこじれる場面があるのは、お分かりですよね。

それを平和的にバーチャル・戦争ゲームで決着しようというのが国連の意図なのです。

これが『デイバック』の意味です。

国際社会のエスタブリッシュメントは、庶民には伺い知れないほど進化しております。現代は国際政治の裁定にも、バーチャルと萌えが必要な時代なのです。

いかがですか？」官僚は始終冷静だった。「参加するかどうかは、あなたの自由意思がすべて」

「ちよつ……。国連とか国家とか戦争とか、なんかすごい重圧じゃありませんか」

「いえ。すべては夜の霧のごとく、バーチャルなのです」

「でも、戦争に参加ってことは、これって要するに仮想の徴兵のことなんじゃないですかね」少女は冷静な意見を吐いた。

「その通り」

この娘、意外に賢しと、冷静な官僚の顔に、少し熱意が宿る。

「さあ。日の丸背負った戦争ゲームに、まったく無責任に参加していただけませんか？ 無責任でいいのです。未成年の児童なのですから。結果は絶対に問われませんよ。完全な秘密です」

身を乗り出す国家公務員。

「ゲーム内では、人はリアルには死にませんし、お金も労力もかかりません。地位も名誉も与えません。国連が背後に付く公正な娯楽ミリタリーゲームです」

官僚の眉間に眉根が寄っている。

「これは単なる遊びの戦争ごっこなのです。遊び感覚で参加してもらうのが、我々の本意なのです」

男は厳めしい顔で案内パンフレットを差し出す。

「しかも参加者はみな、アンダー・フォーティーンのガールズだけ。年齢制限を設けるのは、辛辣な展開を避けるための国連の深い配慮です。他意はありませんので」と念を押した。

恵子は受け取ったパンフを、まじまじと見つめる。

『秘密の徴兵ポスター』というマンガチックなロゴの見出し。

ミリタリーアニメの美少女CGが描かれている。

『リクルート！

新兵来たれ！

女の子、集まれーっ。

今回は戦闘機の空戦だあ。

場所は世界のカオス、アジアだぞう。

時代設定は、第二次大戦下の科学進度だお。

メカ設定では最高の時代だあ。

空襲警報発令。

太平洋の覇権をかけて出撃！ アジアン・ガールズ！』

中学生は汗を垂らして沈黙した。

これはただごとではない。

今、世界の裏側では何が起きているのだろうか、と不安になった。

「ゲームへの参加は、自宅にいながらでOK。日常のままの自然さが一番。リラックスできるでしょう？」

男は笑顔。

「精神面の安全性も保証します。万が一ゲーム参加において、何らかの精神的外傷を被った場合、損害賠償を受けられます。これは一般の商業製品と同じ。保険も掛けてます。なんら特別なものではないのです。日曜日の一時間、ネットを通じて、気楽に、あるオンラインゲームにエントリーしてもらえれば、それでいいのです」

政府の役人は冗談のように解説を終えた。

しかし、その言動と態度の背後に、異様な圧迫感が見え隠れするのは、中学二年生にも読み取れた。

「なんだかすつごく、うさんくさいんですけど……」

恵子は当たり前のごとく躊躇する。

「洗脳プログラムとか、怖いです。政府って、あんまり信用できないです。私、ステイブ・キングとかの小説を読んですすんで」

「あれは前世紀のSF古典フィクションですよ」中学生の少女趣味を官僚は鼻で笑う。「確かに二十世紀のアメリカには、政府が係わったマインド・コントロール計画みたいな陰謀論がありますが。しかしここは平和な日本。ザ・ジャパンです。サブカルです。世界史に残る萌えの発祥地です！」

少し声が大きくなった役人は、大きく咳払いをする。

テクノクラートに美少女ゲームファンは多いと言う。

「繰り返しますが、安全性は完璧。保障も完璧。これは遊び。美少女を主人公にした戦略ゲームなのです。私を政府の役人ではなく、美少女ゲームの営業マンとお考えください」

「それって、すごく変なんですけど……」

しかし、美少女、と呼ばれたことに、中学生に少し笑みがこぼれる。思春期の自意識をくすぐった。

「現在の私の会話はすべて記録されて、進行形で政府に保管されていますから、必要とあらば確認されてもOKです」

と言って首相官邸へのパスを差し出した。

「確認の用があれば申しつけください」

「本当なんですね」

役人は厳かに頷いた。

「このパンフ、もらっていいですか？」と恵子は聞いた。

「どうぞ」と政府の役人はあつさり言った。

＊

「びみより」彼女は溜息をつく。「日曜日の一時間だったって、やりたいこともあるし。ネットでマンガ読んでるほうが楽しいし」

休み時間に教室のベランダでパンフを眺める。

「戦争ゲームだったって。興味ねえし。乙女ゲーなら考えてもいいけど。参加者が女の子だけじゃあなあ……。百合展開になるのミエミエ」

「よっ、けいこ。どうしたあ」背後から友人の女の子が肩を叩く。

「ねえ、ちよっと質問があるんだけど」マジ顔。

「なに？」

「国連のバーチャル大戦ゲームって知ってる？」真剣に聞く。

「は？ なにそれ……」

「戦争ゲームなんだそうだけど、参加しないかって言われて」

「誰に？ 彼氏にか？」

「いねえよ。……それが偉そうな政府の役人とか言うオヤジなのよ」

「オヤジって、なんか危なくない」

「やっぱそう思う？」と言って、政府の役人にもらったパンフレットを、友人に見せた。

「なにこの萌え絵！ なんの冗談」友人は大笑い。「出撃、アジアン

ガールズだって。どこの風俗だよ」  
「……ホント、嘘っぽいよね」

## 2

「第二次大戦ねえ」

自宅の部屋の中だった。  
机に座って岩本恵子は考え込んでいる。

「遠い遠い昔の戦争」

白黒の記録映像でしか見たことがない、昔の世界。  
そこでは本当に人間が原始的な殺し合いをしていたと言う。

恵子は試しに、と思つて机のノートPCを起動する。

ゲームへのエントリーは、市販のマシンで、機種は選ばない、という説明だった。

役人の黒田から配布された『魔法のリンゴ』という妙な名前のプログラムをインストールし、教えられたURLを打ち込む。

指定のサイトを表示すると、空間投影ウインドウの画面に、少々卑猥な印象を受ける国連のマークと、齧ったリンゴのマークが現れ、ようこそ、と言う日本語が、閃光となって視野に飛び散って消えた。

3Dのように画面から文字が飛び出してくる。

「これはすごいプログラム……」と恵子は驚いた。

前方の空間に『ログインしますか？』の文字が浮かび、はい／いいえ、の選択肢が炎となつて揺らめいている。

はい、を矢印で選んでエンターを押す。

炎の文字が裂けて弾け、画面が爆発したように身体を取り巻き、空

間が歪みだす。意識にトランス感が起こる。

意識開発プログラムという最先端のIT技術だ。

覚醒したまま通常意識に仮想リアリティが入り込み、バーチャル世界が現出する。

「はわっ！」と恵子は声をあげた。

二次元平面ウインドウが三次元に変化する。

平面の視野が揺らめきながら大きく拡大し、後方へ飛ぶように流れて、視野の中にドラッグ感が起こる。

これが二十一世紀中盤に研究され始めた最新テクノロジーだった。要するに、ドラッグを使わずコンピュータによって人間の意識領域を広げ、人類共通の無意識世界（インター・ゾーン）を探り出してデータを個人の意識と連結させるサイバー技術だ。

この辺の研究は、すでに二十世紀の後半から、アメリカ西海岸を中心に研究されていた。

初期のコンピュータ技術者たちは、この流れに属していた者が多い。

インター・ゾーンへのバーチャル・ログイン。

すでに恵子の身体が仮想世界に入っている。

仮想とは言え、集合意識とリンクした世界観は、リアルな体感と触感がある。

意識は醒め、呼吸も平静。心音も安定。

スタイルも風貌も、まるでリアルと変わらない。

恵子は落ち着いて心身をチェックすると、案内の矢印にしたがって光のトンネルのような一本道を歩き、ゲーム説明会場へ入って行った。

照明の落とされた通廊には、沢山の光るウインドウが夜光虫のように揺らめいている。

その中から外の時代の風景が見えた。

揺らめく窓の中には、戦艦や航空機が、発砲しながら戦っている場面が多数映っている。

二十世紀前半の太平洋の風景だ。

ここは近代日本の意識層らしい。

少し歩くと、暗黒の中にスポットライトが当たっていて、照明の中に、外の世界を飛んでいた重量感のある昔の飛行機が展示されていた。先端にプロペラがついた博物館の展示品のような飛行機だ。

しかし、目の前のマシンは、工場から出荷されたばかりのようにピカピカに輝いている。

「ゼロ戦だ」と言っただけで恵子は、コンコンと、鉄の機体を手で叩く。

「確かに本物。……展示機は見たことあるけど、ほんとに空戦やれるのかな」

しげしげと観察する。

「うーん、ぴかぴかの実動機だ。でも時速六百キロ程度が限度かなあ。運動性能はいらしいけど」

乙女にしては割と詳しく状況を分析する。  
暗がりには、他の機体も展示されている。

アメリカのP51ムスタングもあるし、むしろこっちのほうが好きなドイツのメッサーシュミットやフォッケウルフもある。

段々乙女の目が輝いてくる。

機銃も本物だった。

「二十ミリ機関銃……。擬人化兵器じゃないし、魔道エンジンでもない。油まみれの本物だ」

エンジンを触ると手に油が付き、機体からガソリンと機械油の匂がする。

『日本乙女帝国・海軍』と仰々しく墨書された旭日旗付き入場ゲートには、幾つかの選択肢がある。

1 まずはこちらから・予科練・飛行練習生（霞ヶ浦）

2 ステップアップ・航空隊配属・練成（横須賀）

3 低難易度・実戦・小隊機（三機編隊・三番機）

4 中難易度・実戦・小隊長（編隊・一番機）

5 高難易度・実戦・中隊長（編隊統率・十から二十機ほど）

6 超難易度・南方激戦区で航空戦（単騎巴戦）

各番号ゲートから先には、さらに選択肢が別れ、視覚化した時間の波の中に、平行世界の映像が揺らめいている。

横須賀、大村、台南、ラバウル、ガダルカナル……。

まだここまでは、仮エントリーだからいつでも引き返せる。

入場しますか？

はい／いいえ、の選択肢が、大きな炎の弾幕ログに変わって空間に撃ち出される。

「リアルにできて面白そう」目が真剣。「美少女・空戦ゲームだ。エロルートはあるの？」

「南太平洋か。南の海はきれいだろうなあ」ぽわあぁと、乙女の脳裏に夢が広がる。

「珊瑚海とかトラック諸島とか、飛んでみようかな。海に落ちたらスキューバもできそうだし」

南洋で落ちたらフカの餌なんですけど、という大人のリアルな忠告は、夢見る乙女には聞こえない。

すでに、恵子の気持ちたちが弾んで軽くスキップ前進している。揺らめく立体ウインドウの中に見える各基地入場門の前を、覗き見る。

「でも、1じやまどろつこしいぜ。練習機は複座で鬼教官が後から怒鳴るパターンだよな」と扉の向こうを注視する。

誤って入ってしまったら引き返せない設定。状況確認は的確に。



「マジにやると馬鹿らしす。軍隊なんて、すぐ新兵いじめるし。精神注入棒とかでぶっ叩くし。体育会系シゴキの原点だよな。訓練なんかやってられねえっす。私はゲームがしたいのだった」

複製機とか、安っぽい造りの練習機が扉の向こうを飛んでいる。  
「パス！」

と霞ヶ浦、予科練の教習課程を平気で素通り。  
現代乙女は個人主義。

お国のため、なんてことは、絶対に言わない。  
右も左も関係なし。

シユミ優先。楽しけりやあそれでよし。それ以外に価値なくし。  
「2の練成もつまんね。横空か。追浜飛行場。ここはテスト基地を兼ねてるからな。変な選択分岐踏んで空技廠の新型機に人柱として放り込まれたり。ゲームでも自爆はやだよ。ただ戦争ごっこがしたいだけ」と見慣れた横須賀の風景を眺め。

「パスッす！」素早く通過。

「やっぱりドッグ・ファイトが一番楽しそう。空で撃ち合うシユーティング・ゲームだもん。まずは速攻、6からよねっ！」いきなり実戦。ラバウル航空戦参加。

「日本乙女海軍に殴り込みじゃっ。南洋の平和は私にまかせい。待つとれ、飛行機乙女ども」

軍歌の変え唄を歌いながら、軽いスキップで、不用意に扉をくぐっている。

ふわっとジャンプして鏡のような入口をくぐり、向こう側の世界へ着地する。

何気なく振り返ったら、後の空間ウィンドウが掻き消すように消えていた。

振り返ったまま硬直して、顔から汗が垂れる。

一瞬、背筋に冷たいモノが流れた。

身体を見ると、服装が白セーラー服に変わっていた。

波の音が聞こえてきた。

春の海風が、心地よく吹いてくる。

四月なのになんか暖かい。

南国特有の気候だ。

土手に桜の花が、並んで咲いている。

目の前には、滑走路が広がる海辺の基地があった。

土手の上から兵舎を覗き見すると。

航空兵たちが奇麗に整列している。

全員、女の子だった。

「わー、白セーラーがたくさん」岩本恵子はちよつと感激する。  
胸に桜に碇のシンボルマーク。

日本乙女帝国海軍だ。

「セーラー服って、もともと海軍の制服なんだよね。下っ端の」  
と自分の胸元にも付いている海軍のマークを見る。  
袖には階級章が付いていた。

桜マークが一個だけの二等飛行兵だ。一番下っ端。

「うえーん。パシリやだよー」と不平を言う。

アンダーウェアはスクール水着ではなく、黒スパッツのスポーティな短パンだった。

お尻の線が、奇麗に見えて、中々ナイス。

土を均した滑走路に隊列が勢ぞろいしている。

白以外にも黄色や赤や黒の服などが混じって、カラフルな花壇のよう。

壇の上に基地司令みたいな人が立って、訓示を垂れている。  
司令も女性だった。

と言うか、遠くから見ると基地司令官、ちんちくりんな女子児童に見える。

ミニチュアの白詰襟を着て、下は白スカート。両肩にでっかい階級章を付けている。

――戦に負けてはいけないのですの。

竹槍精神で勝つですの。

日本精神主義は永遠ですの。

死んでも生きてる日本のアニミズムですの。

乙女は度胸と愛嬌ですの。

がんばるですの。

ですの。ですの。と少女の司令は顔を真っ赤にして演説している。  
そして、はわわ、とわめいたかと思うと、演壇の端から滑って落下した。

どっと笑い声が隊列から漏れた。

「はわわ司令、しっかりっ！」と航空兵たちから声援が飛んでいる。

「たいへーん。葉和田大佐、気絶してるわっ」

「衛生兵ーっ」

なんだか朝から慌ただしい。

異様な風景を、ぼけーっと見とれていたら、

「貴様、何をしている？」

と背後から声をかけられた。

黒詰襟の女性将校が、朝日を逆光にして立っていた。

手に軍刀を下げている。

すらりとスタイルの良い長髪黒髪の美少女だ。

長い前髪と後髪を、日の丸の鉢巻で留めている。

黒詰襟の下には、ミニスカートを穿いていて、フトモモと白生足が美しい。

恵子は、乙女応援団のようなハイセンス戦乙女に見とれて沈黙した。  
「何をしているのか、と聞いている」ミニスカ乙女将校が険しい顔で聞く。

「は？ いえ、ちよつと見学を……」

「ここが海軍航空隊の重要基地と知つての狼藉か」

「へ、狼藉って……」

将校はすらりと軍刀を抜いた。

日の丸鉢巻の長い尾が揺れた。

「わっ」と恵子は立ち上がって後ずさり。

「貴様、まさか敵国のスパイか？」柳眉を逆立てて戦乙女は刀を構える。「その茶色い髪とゆるんだ顔つきは何だ。大和撫子ではないな！」

「ゆるんだ顔つきは生まれつきです」恵子はむつとして言い返す。「それに茶髪は今時、中学でもOKなんですよ」

「敵国語を使うな、馬鹿者！ たるんだ娘に戦時下を生きる資格なし」刀を上段に構えた。「そこへ直れ！ 一刀にて処分してくれる」

ひっ、まじっすか！

なに、この軍刀乙女！

これゲームだよね。

私、リアルには死なないよね。

切られたら血が飛ぶのでしょうか？

でももうゲームオーバー？

飛行機乗れねえの？

目をつぶった恵子は、走馬灯のように記憶を回転させて、身を縮めて硬直した。

「……なんてな」と黒詰襟の将校は、ぽつりと言って刀を鞘にしまう。

「冗談だよ。冗談」と顔色を変えずに片手を振る。

恵子は薄眼を開ける。

「気の小さいやつだな。そんなことで戦闘機の搭乗員がつとまるのか？」ミニスカ詰襟将校は心配そうに言う。

恵子は呆然と突っ立っている。

「貴様は基地の訓練生だろう？ 服装を見れば了然だ」と言って通り過ぎようとする。「さぼっていてはいかんぞ。さつさと整列せんか。もう司令の訓示は終わったぞ」

恵子は、あなたは誰です？ とおずおず問うた。

「はあ？ 誰ってお前、飛行隊長の坂上麗華だよ」

坂井でも坂本でもないらしい。

階級章を見ると大尉だった。

邪気眼の眼帯はしていない。両目がある。ガダルカナル戦より前らしい。

「いえ、あの。私、今日来ただかりで」やっと落ち着きを取り戻し恵子は言った。

坂上大尉が振り返る。

「何？ すると今日入隊か。あれ、そういえば、さつき、はわわ司令から連絡があったが。貴様だったのか。なあーんだ」

「……はわわ司令って、あの幼女？」

「えーっと、新人の名前は、確か……岩本。岩本恵子。横須賀出身とか書類に書かれていたが、そうなのか？」大尉の目がキラリと光る。あれ、リアル身元がばれてる。現実世界とも連携しているのかな、と恵子と思う。

「なら挨拶だ！ 朝礼も終わったし、みな滑走路にいるぞ」と恵子を連れて滑走路へ降りて行く。

恵子はとりあえず付いて行くことにした。

セーラー服のパシリ整備員が、きやぴきやぴしやべくりながら、飛行機を手押しで格納庫から出している。

戦闘機は零戦だ。

相当大きな規模の飛行場だった。色々な戦闘機があり、海軍機は殆んど揃っている。飛行訓練基地も兼ねているようだ。

恵子は滑走路をキョロキョロと見渡す。

しかし、不思議なのは飛行服を着たパイロットの姿が見えないことだ。落下傘を背負った飛行服の訓練生の姿など、どこにも見えない。すぐ傍に、なぜか私服姿の女の子たちが固まって円陣を作り、何かを相談している。

民間人がなぜ滑走路にいるのだろう、と不思議に思う。

「部隊整列！」

坂上大尉が怒鳴る。

と、二十人ほどの乙女パイロットたちが集まってきた。

見ていた恵子はぎよつとした。

集まって来たのは、その私服の民間人たちであった。

最初に来たのが、メイド服の大集団、

次に来たのが、ふふんと鼻で笑う高貴な白ドレスのお嬢さま、

次に巫女服の和風黒髪娘が落下傘背負って現れ、

体操服にブルマを穿いた乙女出現、

さらに、学園紺ブレスカートの吊り目ツインテールが現れ、

最後に、のそのそとタバコをくわえた黒ゴスロリ娘が、あくびをしながら輪に加わった……。

絶対にみなさん制服を勘違いしている。というか元の職業のまま急に集められたのか。即席義勇軍のようだ。

みんな美少女なのが異様だった。

髪型も長髪ありショートあり巻き毛あり、金髪、銀髪、桃髪、赤髪、虹髪もいる。

パイロットである証拠に、全員、頭の上に二眼ゴーグルを乗っけている。

共通項はそれだけ。

散開して坂上大尉と岩本恵子の周りを取り巻いた。

海軍っぽい自由な雰囲気漂っている。

全員乙女だから、なごみ度も高い。

「新しい仲間を紹介する」

ミニスカ坂上大尉が言う。

「岩本恵子二飛兵だ」

突如、びしつ、と全員敬礼で迎えられた。意外によく訓練されている。

「わっ、ど、どうも。初めましてえ」

恵子はうろたえながら、両手を脳天に上げて、ガニ股になり、なんちやって敬礼をする。

かなり慌てていた。

「新人の女の子に質問があるんだからっ！！！！」輪の中の一人の少女が、怒ったような声で質問した。

紺ブレスカートの学園制服を着たツインテールの少女だ。

校章のワッペンが乙女帝国のマークになっている。

「はいっ。な、なんでしょうか？」恵子は背筋を伸ばして緊張する。

「ブラのサイズは何カップか、教えるんだからっ！！！！」

「はあ？」

「えと、翻訳するとですね、胸のサイズを教えてください、と聞いてます」隣の垂れ目メイドさんが、やさしく言う。

「えっ？ はええ？ 胸のサイズ？」

「岩本。どうなんだ。先輩から質問がきとるぞお」詰襟のミニスカ上官も、目を細めて興味深そうに恵子の胸を見つめて、問い詰める。

乙女は、人のがとても気になるらしい。

恵子は顔を赤くして答える。

「……75のAです」小声で言った。

「つるぺた認定！」全員で斉唱。どっとヤジが上がる。

「ロリ！」

「稚児！」

「胸もパシリ！」

「妹！」

「嫁！」

「わての」

「ボクの」

「お姉ちゃん」

「わし巨乳派」

「わたくしのメイド」

「SなのかMなのか？」

「別に嫁なんか、欲しくないんだからねー！ー！ー！ー！！！！」

岩本恵子は、青くなつて後によりめいた。

「ここつて、いったい、どこ？」

おおむら

「ここは九州。日本乙女帝国海軍、大斑航空隊だよ。はっはっは」坂上大尉が快活に笑つて言った。

「確かに」恵子は汗を垂らして呟く。「人間にムラがありすぎ」

#### 4

「へえ、じゃやっぱりここ、女の子しかいないんだ」と恵子が聞く。「そう。下士官クラスは服装も髪型も自由。軍隊つて感じじゃないね」と整備兵が答えた。

夕暮れの飛行場で、セーラー服整備員と話す岩本恵子。

彼女は、恵子の機体の専門整備員になるという。

ゼロ戦には通常三人程度の整備員が配置されるというが、現在は人手不足で、彼女が一人で整備を担当するとか。

恵子はゼロ戦の翼に腰掛けている。

見下ろすネオ・オカッパの整備兵の頭には、触覚が二本立っていた。クラナドのヒロインにそっくり。

彼女もここに配属されて日が浅く、同じセーラー服に同じ階級章を付けている。これなら気安く友達になれそうだと恵子は思った。



「階級が上がると服装自由って、すごいね。乙女帝国」

「ここへ来る前、リアル世界で徴兵のパンフ貰った？」と触覚娘が聞く。

「もらったもらった。変なオヤジにさあ。バカみたいなヤツ」恵子は思い出して笑う。

「ミッドウェー海戦の後みたいよ。今の歴史の進度は」

「ミッドウェーって、空母が四隻沈んだ海戦？ 負け戦の端緒よね、あれ」と日本史を教科書の知識から捻りだす。

「そう」

「こっちのゲームでも負けてるの？」

「ほとんど同じ。連合と枢軸でやってるね。どつかのミリタリー雑誌みたいよ」

「ふーん。劣勢なんだ」恵子は、徴兵担当の黒田の顔を思い出した。「どうりであの役人、顔が引き吊ってたはずだよ。すごい熱心に勧めてくるし」ぷぷっと吹き出す。

「ところで美紀ちゃんにはリアルで何やってたの？」と恵子は、触覚整備兵の名を呼んで聞いた。

「普通の大学院生よ。飛び級なの。学校では研究室で機械工学系の専攻だったの」

「へえ、院生って」と恵子は驚く。「専門家なんだね。十三才なのに。でも専門家じゃないとゼロ戦の整備なんてやれないよね」

「不思議なんだけど、ここに集められてくる乙女って、みんな何かの専門を持ってる人のような気がするの」

「でも、あの黒田ってオヤジは、ランダムな籤で選んだとかって言うてたけど」

「表向きはね。でもやっぱり違うのよ。戦闘機に乗ってる人たちも、どっか普通じゃなくて、運動の天才みたいな女の子たちばかりなの」  
「と言って中野美紀は、じつと岩本恵子を見た。「基地司令の葉和田大佐って人、見た？」

「見た見た。幼女よね。どう見ても」はわわ、と叫んで演壇から落下した姿を思い出して、恵子は笑いをこらえる。

「あの人、リアルで小学三年なんだけど、IQが二百近くある天才な

のよ」

「げえっ！！！！ 小三！ IQ二百って、ゲーテかよ！」

「そういうどっかトンでる人たちばっかなのよ、ここにいる乙女は」「ほえーっ」と恵子は顎を外す。「いや驚き。普通じゃないってのは、納得だけど……」

と考え込む。

「乙女帝国すごいわあ。じゃあ、これからみんなで勝ちに行くパターンなのかなあ。精鋭を集めてさあ」と、ユニークなメンバーの姿を思い浮かべて恵子は微笑した。

「なんだか体育祭のノリよね」と言って美紀も笑う。

飛行場を遠く見渡せば、夕陽が落ちて、南国に夕暮れがやってくる。赤い夕陽が飛行場を照らします。落ちて行く日章旗のように。

飛行場とゼロ戦を赤く染めあげていた。

「でもこのゲームで勝ち負けを決めて、リアル世界では、何が起こるんだろ。その辺聞いてる？」

「全然。秘密とか言って」美紀は両手を開いて首を傾げる。

「肝心なことを教えてくれないんだよね。変なゲームだよな」

「でも結局、そんなもんじゃないかな。戦争なんて」

「そうかもしれないね」

話し込んでいるうちに、涼しい夜風が飛行場に吹いてきた。

紺色の夕空に、黒い影になった椰子の木が並んで揺れる。

静けさが戻った飛行場に、海鳴りが聞こえてきた。

遠くには太平洋へ繋がる海が広がっていた。

\*

起床ラッパが兵舎に鳴り響く。

日付が変わりゲームの世界で一夜が明けた。

目が覚めても、いまだにバーチャルの世界にいる。

「あれ、目が覚めてもリアルに戻らないよ」と不思議な感覚に岩本恵子は驚く。集合二段ベッドから飛び起き、セーラー服に着替えて、中野美紀と一緒に、時代がかった木造の食堂で楽しく朝食を取る。

麦と玄米に山菜、イモ中心の健康的な朝食だった。

腹を満たして滑走路へ出て行き、全隊員でラジオ体操を始める。

朝の海辺の空気はすがすがしい。ラジオ体操の音頭は月月火水木金金。

はわわ司令の熱の籠った毎日の訓示の後、部隊ごとに別れて、一日のメニューをこなす。

現在の飛行中隊の活動は、飛行訓練がメインだという。

岩本恵子は坂上大尉から、まず小隊長に挨拶、指導を仰げ、と言い渡された。

案内してください、と頼んだら、はっはっはと大声で笑った後、自分で探せと言われた。

一応階級差があるらしい。

「パシリは辛いです」と不平を言いながら、ノートと筆記用具と案内書類を持って、ぶらぶら滑走路をうろつく。

中野美紀は格納庫に入って、戦闘機の整備を始めていた。

「美紀ちゃんの仕事があつていいな」と羨んだ。

坂上大尉直属の飛行隊は、規模から言うと中隊で、四つの小隊で構成されている。

四小隊、各三人編成で、全部で十二人のパイロットがいた。つまり小隊長は四人。

空では、この小隊長機が三機編隊の一番機になる。

恵子は挨拶回りに小隊長たちを訪問することにした。

現状この基地は、新作戦のために編成中らしく、案外暇なので、みんなたいてい滑走路できゃぴきゃぴだらやっている。

リアル世界の徴兵役人、黒田が引きつった顔で新兵を集めていたのは、こっちの世界の『新作戦』編成のためだと言っていたが、はて、

これから何が起こるのやら。

そういうわけで、基地内を散策してみると……。

滑走路の片隅に、全体が漆黒に塗られた異様なゼロ戦があつた。

撃墜マークはドクロのイラストで、機体にドクロがたくさん並んでいる。迫力のマーキング。これは一種の痛ヒコーキだろうか、と思う。

恵子の手元の航空隊編成図と照らし合わせてみると、通称、ゴシツク小隊と呼ばれる小隊の一番機らしい。

「続きは製品版でお願いするですの」  
と、はわわ司令から入電が来ております。閣下。